

現代日本経済史講義

第21回

3-5 戦後復興期の経済構造

2004年冬学期

武田晴人

⚡:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。

戦後復興期の経済構造

- ①例外的な物価上昇
 - 長い占領期間のなかで、その半ばの期間に他の敗戦国では例を見ない物価上昇が続いている。
 - 戦後補償問題、敗戦直後の過大な通貨供給、極限まで追求された戦争体制の反動としての供給不足、そして抑圧された消費欲求の繰り延べられた発現
- ②復員と人口増加
 - 需要拡大の第一の要因としての人口の増大
 - ・復員による人口の社会的増加 1945-46年に450万人
 - ・ベビーブームによる自然増—非労働力人口の比率上昇

● ③需要構造の変動要因

● 消費需要の拡大に注目する必要がある。

● 国民総支出の推移

- 変動の条件は、1940年代後半には変化が激しく、1947-49年には増加分の3分の1から半分が個人消費支出のうちの飲食費。こうした傾向は、50年代前半期にも再現。
- 「生産者耐久消費財」＝民間設備投資の拡大が目立つのは朝鮮戦争期、高度成長期
- 朝鮮戦争期の輸出＝特需が1950年代初頭のスパートの条件
- 財政需要の内容 1947-50年の価格調整費、1951年以降の防衛関係費

年度	個人消費支出	国内総資本形成				経済海外余剰			政府の財貨サービス購入		
		個人住宅	生産者耐久財	在庫品増加	小計	外国の支払(輸出等)	外国の受取(輸入等)	差引	経常購入	資本形成	小計
1947	69.7%	1.4%	6.9%	6.5%	14.8%	2.7%	6.9%	-4.1%	5.7%	13.9%	19.6%
1948	60.9%	1.8%	8.6%	11.3%	21.7%	3.9%	8.0%	-4.1%	13.3%	8.2%	21.5%
1949	73.3%	- 1.6%	10.9%	-3.9%	5.3%	19.1%	19.2%	-0.1%	15.7%	5.7%	21.4%
1950	23.8%	4.2%	17.7%	28.1%	50.1%	44.2%	6.6%	37.6%	7.6%	- 19.1%	- 11.5%
1951	41.5%	0.8%	14.7%	13.5%	29.0%	29.3%	22.4%	7.0%	7.7%	14.9%	22.6%
1952	98.1%	3.6%	15.2%	- 26.0%	-7.1%	- 11.7%	7.6%	- 19.3%	19.1%	9.2%	28.3%
1953	69.6%	3.2%	9.1%	1.3%	13.6%	8.9%	18.4%	-9.5%	8.9%	17.5%	26.4%
1954	102.0 %	1.6%	- 10.7%	- 37.7%	- 46.8%	11.7%	- 25.8%	37.5%	20.5%	- 13.2%	7.3%
1955	49.1%	1.2%	2.2%	24.4%	27.9%	17.1%	15.7%	1.4%	5.6%	15.9%	21.5%

會計年度	1935-36	構成比	1947-50	構成比	1951-55	構成比	1956-60	構成比
国家機関費	489	7.1%	2,137	10.8%	5,291	11.3%	6,968	10.2%
地方財政費	23	0.3%	2,557	12.9%	6,936	14.8%	11,921	17.5%
防衛関係費	3,069	44.8%			6,271	13.4%	7,596	11.1%
対外処理費			135	0.7%	198	0.4%	1,234	1.8%
終戦善後処理費			3,685	18.6%	1,358	2.9%		
国土全開発費	507	7.4%			4,195	8.9%	10,395	15.2%
産業經濟費	309	4.5%	4,711	23.8%	6,406	13.7%	5,192	7.6%
教育文化費	458	6.7%	794	4.0%	4,184	8.9%	8,377	12.3%
社会保障関係費	101	1.5%	1,052	5.3%	5,358	11.4%	8,744	12.8%
恩給費	524	7.6%	87	0.4%	2,221	4.7%	5,208	7.6%
国債費	1,159	16.9%	881	4.4%	1,804	3.8%	2,206	3.2%
出資	0	0.0%	815	4.1%	1,713	3.7%		
価格調整費	0	0.0%	2,952	14.9%	904	1.9%		
その他	216	3.2%			54	0.1%	425	0.6%
合計	6,857	100.0%	19,804	100.0%	46,894	100.0%	68,266	100.0%

● ④個人消費の要因

- ・所得の名目的上昇
- ・勤労者世帯の収支 高いエンゲル係数からの離脱 減少分は雑費に回る構造
- 高度成長期の住居費の急増との相違

● ⑤入超基調の貿易構造

- 工業製品の黒字、農産物・鉱産物の赤字
- 特定の輸出地域を持たない輸出構造

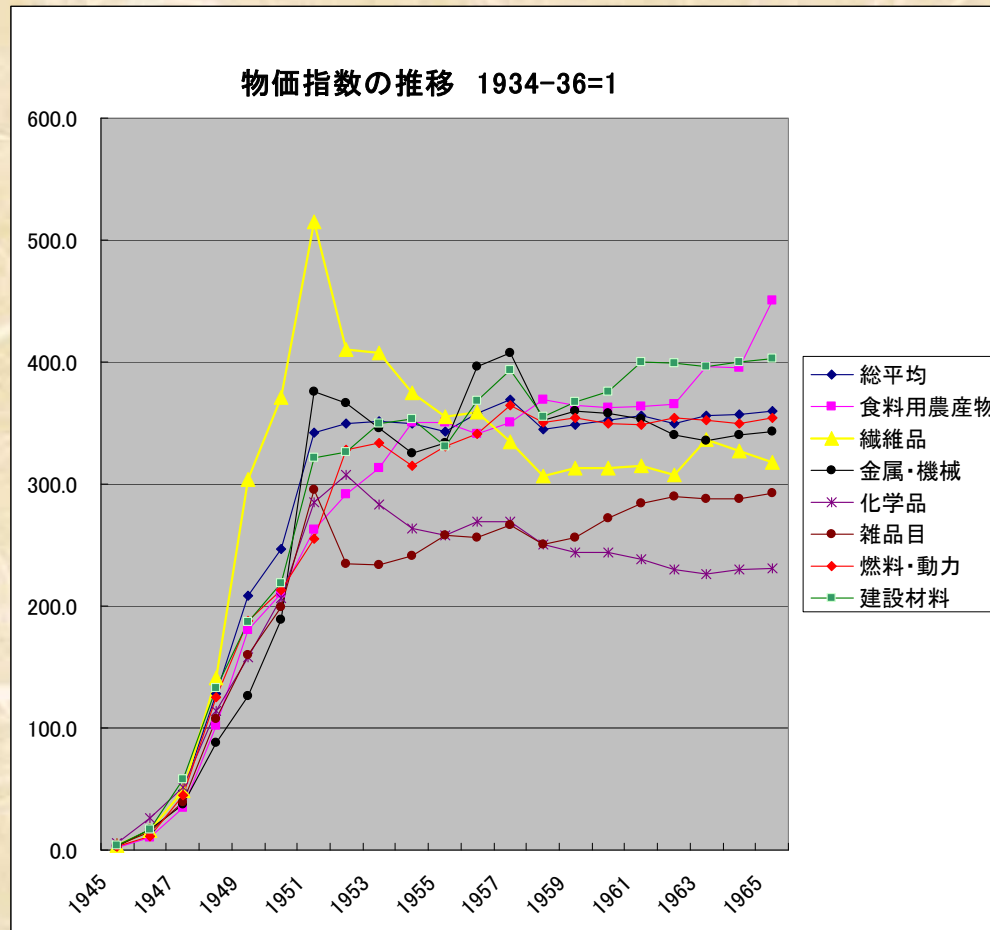
個人消費支出						
年度	飲食費	被服費	光熱費	住居費	雜費	小計
1946						
1947	45.7%	5.0%	3.0%	2.2%	13.9%	69.7%
1948	36.1%	3.4%	1.9%	4.9%	14.6%	60.9%
1949	50.1%	5.7%	3.0%	3.3%	11.3%	73.3%
1950	3.2%	10.3%	1.7%	4.7%	4.0%	23.8%
1951	21.5%	5.1%	1.7%	2.6%	10.7%	41.5%
1952	42.7%	11.1%	3.5%	11.1%	29.6%	98.1%
1953	32.8%	3.9%	2.9%	6.6%	23.3%	69.6%
1954	52.4%	-1.3%	3.7%	13.4%	33.8%	102.0%
1955	12.0%	3.4%	1.1%	9.6%	23.2%	49.1%

主要消費財の消費量

一人あたり消費量増加倍率

	1946年	1950年	1955年	1960年	1964年	1946-50年	1950-55年	1955-60年
米	82.7	121.5	110.6	114.3	114.7	1.5	0.8	0.9
砂糖	0.20	4.89	12.35	15.01	17.72	24.5	17.5	6.0
繊維 計	1.19	2.54	6.68	6.98	8.30	2.1	3.3	3.8
綿	0.79	1.18	3.61	2.59	2.68	1.5	2.7	3.4
毛	0.17	0.36	0.85	1.10	1.18	2.1	3.6	6.3
化繊	0.10	0.71	1.74	2.75	3.86	7.1	9.4	5.4
紙	2.83	10.23	23.81	46.51	74.78	3.6	3.6	2.9

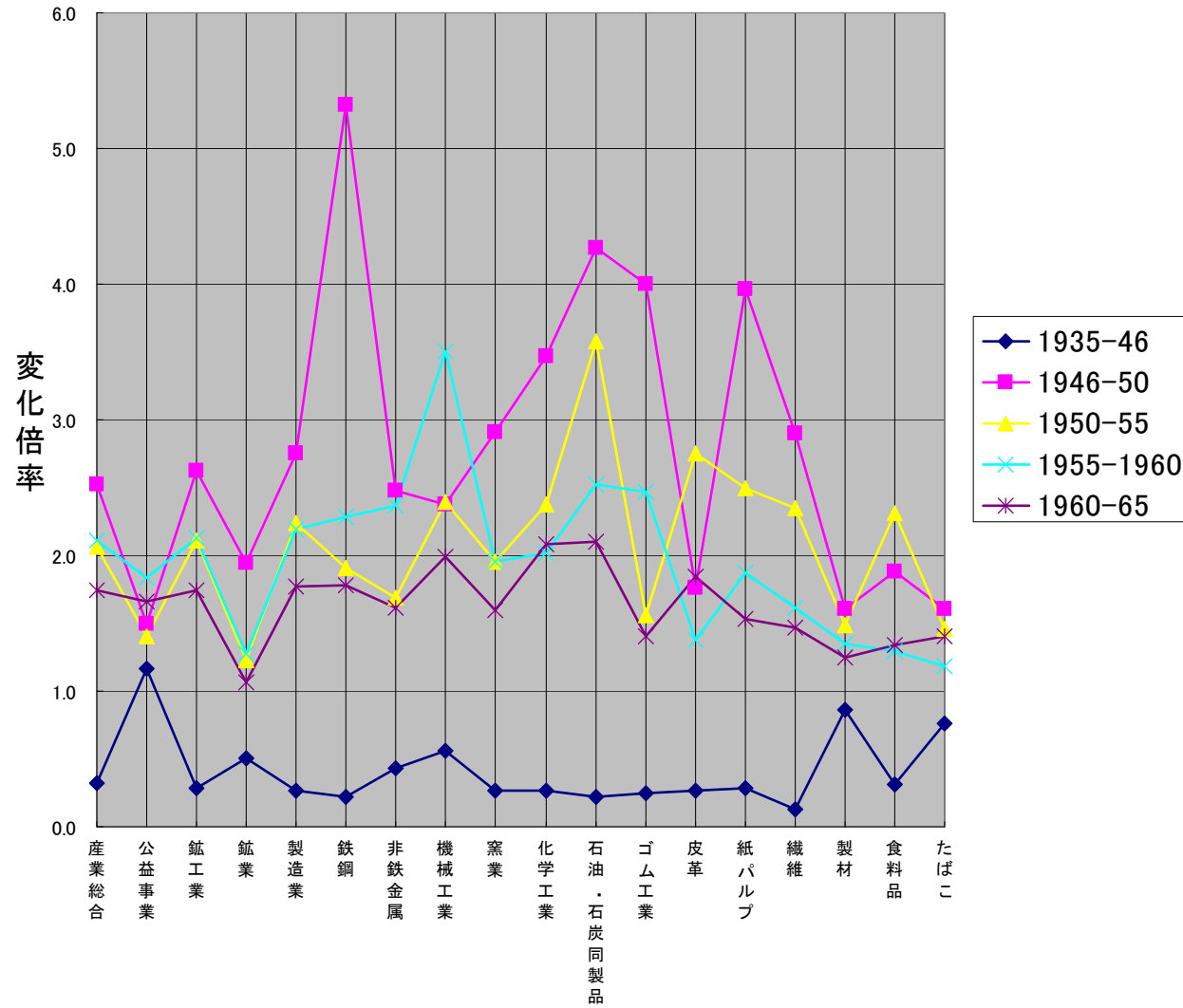
『明治以降本邦主要経済統計』p.354-355



産業構造の変動

- ①. 産業別生産指数の変化率——つまり、数量的な拡大の動向
 - ・1940年代後半の高い拡大率とそのばらつき、60年代にかけての平準化と対照的
 - ・46-50年の拡大のトップは鉄鋼、石炭・石油製品、紙パルプなどの素材—装置産業
 - ・50年代前半の機械の高い伸び

製造工業業種別生産指数の変化倍率



- ②戦前基準の産業分類による構造変化

- - 機械工業化の「後退」

- - 食料品 比率の増加

55年に18.2% ←40年9.1% 47年10.1%

- - その後の経過との対比

	47年	50年	55年	60年
● 紡織	12.3%	22.0%	16.1%	12.3%
● 化学	18.8	22.8	19.8	18.1
● 金属	14.8	14.3	16.6	15.2
● 機械	27.3	13.7	15.1	26.1

- 生産指数の変化に対応して、50年代後半に機械工業化(not重化学工業)がスパート

産業構造1 戦前基準分類 100万円

	1934-36年平均		1940		1942		1945		1947	
食料品	1,158	10.7%	2,465	9.1%	2,482	7.7%	2,334	5.3%	28,285	10.1%
紡織	3,392	31.3%	4,976	18.4%	4,050	12.6%	2,577	5.9%	34,586	12.3%
製材木製品	252	2.3%	1,022	3.8%	1,153	3.6%	2,186	5.0%	27,574	9.8%
印刷製本	221	2.0%	342	1.3%	401	1.3%	442	1.0%	6,038	2.1%
化学	1,802	16.6%	4,623	17.1%	4,876	15.2%	4,057	9.2%	52,767	18.8%
窯業	288	2.7%	778	2.9%	841	2.6%	1,065	2.4%	12,862	4.6%
金属	1,862	17.2%	5,900	21.8%	7,281	22.7%	8,285	18.8%	41,519	14.8%
機械器具	1,446	13.4%	6,443	23.8%	10,332	32.2%	22,570	51.3%	76,752	27.3%
ガス電気	21	0.2%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
その他	386	3.6%	542	2.0%	623	1.9%	451	1.0%	725	0.3%
合計	10,828	100.0	27,092	100.0	32,039	100.0	43,966	100.0	281,108	100.0

食料品	273,239	12.6%	1,128,908	18.2%	1,829,312	12.0%
繊維	441,075	20.3%	929,721	15.0%	1,705,406	11.2%
繊維製品	36,048	1.7%	69,257	1.1%	172,387	1.1%
木材・木製品	80,244	3.7%	246,202	4.0%	520,569	3.4%
パルプ紙、紙加工品	89,610	4.1%	275,570	4.4%	594,548	3.9%
出版印刷	57,246	2.6%	172,108	2.8%	388,916	2.5%
化学	301,632	13.9%	731,015	11.8%	1,458,311	9.5%
石油・石炭製品	31,867	1.5%	123,783	2.0%	371,335	2.4%
ゴム	55,330	2.6%	95,223	1.5%	233,320	1.5%
窯業・土石	78,949	3.6%	221,838	3.6%	526,854	3.4%
鉄鋼	217,086	10.0%	634,688	10.2%	1,650,886	10.8%
非鉄金属	93,534	4.3%	272,110	4.4%	668,042	4.4%
金属製品	52,848	2.4%	169,472	2.7%	594,198	3.9%
機械製造	100,267	4.6%	280,522	4.5%	1,204,893	7.9%
電気機械器具	62,944	2.9%	255,425	4.1%	1,291,620	8.4%
輸送用機械器具	115,121	5.3%	351,092	5.6%	1,325,019	8.7%
精密機械	17,895	0.8%	51,580	0.8%	170,520	1.1%
計	2,167,579	100.0%	6,217,761	100.0%	15,293,704	100.0%

● ③工場数

- ・1947年の製材・木製品の高い水準——復興需要を背景?
- ・1947-55年の機械器具の伸び悩み、食料品も金属の急増
- 復員現象としての機械工場数の減少

工場数

	1935	1940	1945	1947	1950	1955
食料品	13,684	22,578	8,326	13,300	26,243	33,911
紡織	29,378	35,966	9,236	16,492	31,923	39,016
製材木製品	7,518	14,459	9,507	23,271	28,545	30,814
印刷製本	3,358	3,596	916	2,145	4,219	8,415
化学	4,629	9,237	5,109	8,338	13,380	13,366
窯業	4,400	7,105	3,511	5,970	10,297	11,630
金属	7,351	11,663	5,638	9,760	12,804	16,925
機械器具	10,250	24,804	13,262	24,211	20,961	23,937
その他	4,057	7,734	2,475	4,853	7,801	9,087
合計	86,560	139,082	59,925	110,287	156,173	187,101

工場数増減

	1935-40	1940-45	1945-47	1947-50	1950-55	1947-55
食料品	8,894	-14,252	4,974	12,943	7,668	20,611
紡織	6,588	-26,730	7,256	15,431	7,093	22,524
製材木製品	6,941	-4,952	13,764	5,274	2,269	7,543
印刷製本	238	-2,680	1,229	2,074	4,196	6,270
化学	4,608	-4,128	3,229	5,042	-14	5,028
窯業	2,705	-3,594	2,459	4,327	1,333	5,660
金属	4,312	-6,025	4,122	3,044	4,121	7,165
機械器具	14,554	-11,542	10,949	-3,250	2,976	-274
その他	3,677	-5,259	2,378	2,948	1,286	4,234
合計	52,522	-79,157	50,362	45,886	30,928	76,814

- ④戦後基準の産業分類による産業構造変化
- ・産業再分類別の生産額順位
 - 高い交易部門・鉱山部門の地位とその低下、
製造業の発展
 - 1947年の製造業第一位は製材業……
 - 紡績、鉄鋼など 遅れて自動車、通信機など
- ・生産増加率の順位
 - 1940年代後半民需品の高い伸び率、50年代前半も継続
 - 50年代後半に入って重工業の伸張が目立つようになる

産業小分類に基づく生産額上位産業

現代日本経済史2004

	1948年	1950年	1955年
1	石炭・亜炭	紡績業	紡績業
2	国鉄	石炭・亜炭	高炉を持たない製鋼圧延業
3	電力	国鉄	国鉄
4	一般製材業	綿スフ紡績	綿スフ紡績
5	高炉を持たない製鋼圧延業	電力	高炉を持った製鋼圧延業
6	私鉄	高炉を持たない製鋼圧延業	電力
7	紙及び板紙	綿スフ織物	鋼船製造・修理
8	日本酒	高炉を持った製鋼圧延業	一般製材業
9	高炉を持った製鋼圧延業	一般製材業	石炭・亜炭
10	紡績業	紙及び板紙	紙及び板紙製造業
11	医薬品	日本酒	綿スフ織物
12	絹・人絹織物	絹・人絹織物	パン・菓子製造業
13	繊維機械	化学繊維	日本酒製造業
14	製糸業	鋼船製造・修理	砂糖製造
15	硫安	私鉄	自動車
16	鉄道車輛製造	毛織物	毛織物
17	鉄鋳物	銅の圧延・伸線・合金	化学繊維製造業
18	鋼船製造・修理	医薬品	製粉業

業種別の生産増加ランキング

	1948-50年		1950-55年		1955-60年	
1	石鹼	13.94	製穀業	51.34	民生用電気機械器具	7.26
2	製麺業	13.52	製粉業	35.65	金属工作機械・部品	7.03
3	石油精製業	13.29	製麺業	31.95	有線・無線通信機械	6.54
4	綿スフ織物	12.16	砂糖製造	23.01	電子管・半導体素子	6.47
5	鉄鋼伸線業	11.35	民生用電気機械器具	13.29	コンベヤ運搬機械	5.24
6	中衣及び肌着	11.18	電線・ケーブル	10.09	自動車部品	5.20
7	合金鉄	10.63	写真機	8.62	理化学用機械	5.15
8	紡績業	10.25	鉄鋼鍛造業	8.45	有機質肥料	4.35
9	出版業	9.56	電子管・半導体素子	7.62	冷蔵庫・冷凍機	4.35
10	水産缶詰	9.47	有機質肥料	6.63	自動車	4.33
11	製缶板金業	7.94	開閉装置・配電機器	6.51	紙器・段ボール箱	4.31
12	製革業	7.75	変圧器	6.36	構築用金属製品	4.26
13	ブドウ糖及び水飴	6.92	合板	6.24	コンクリート製品	4.26
14	製粉業	6.71	自動車	6.15	建設・鉱山用機械	4.09
15	製綿業	6.53	パン・菓子	5.92	開閉装置・配電機器	4.06
16	構築用金属製品	6.45	合成樹脂	5.65	工業用ゴム	3.89
17	植物油脂製造	6.39	パルプ	5.61	ボルトナットネジ	3.70
18	タイヤ・チューブ	5.74	自動車部品	5.55	ベアリング	3.68
19	化学繊維	5.48	製綿業	5.54	合成樹脂	3.68

大企業部門の動向

- ①売上高の増加率
 - ・不安定な50年代前半の売上げ動向、+相対的に高い重工業部門
 - ・しかし、朝鮮戦争の反動で52-53年にマイナス成長の部門もかなり目立つ。
 - ・58年の「なべ底不況」に匹敵する景気後退
- ②自己資本・総資本の利益率
 - ・高い自己資本利益率 ←過小資本化が進んでいるのか、

売上高		1950	1951		1952		1953		1954	
業種	決算期	下	上	下	上	下	上	下	上	下
産業一般		64.9%	79.7%	1.8%	15.6%	2.9%	9.2%	5.2%	2.2%	3.6%
製造業		51.0%	80.3%	-5.0%	17.1%	2.7%	8.1%	10.4%	-0.6%	-2.4%
	食品製造業	21.6%	18.1%	38.2%	25.2%	13.8%	6.5%	36.1%	7.9%	3.5%
	紡織	47.2%	85.1%	-36.4%	55.3%	-4.0%	-7.0%	13.1%	-4.3%	-8.0%
	製材	22.0%	-55.6%	-10.2%	3.8%	-14.9%	26.0%	98.9%	-1.8%	-9.0%
	紙及び類似品	15.3%	102.1%	6.3%	-7.5%	11.0%	11.0%	2.6%	-3.7%	6.8%
	印刷	4.5%	18.4%	8.9%	13.3%	45.5%	13.0%	13.4%	2.9%	3.6%
	化学	36.4%	32.2%	4.3%	8.7%	3.8%	9.3%	3.2%	8.6%	3.7%
	ゴム及び皮革			-7.4%	-6.3%	-11.2%	15.2%	6.6%	-1.3%	-2.0%
	ガラス及び土石製品	83.7%	51.2%	28.5%	-2.6%	7.2%	6.8%	15.1%	5.2%	0.6%
	第一次金属	132.6%	150.5%	-0.2%	0.1%	-0.8%	15.5%	1.8%	-11.7%	4.3%
	金属製品	591.4%	15.9%	-9.2%	40.0%	-24.7%	33.7%	21.0%	49.0%	-10.9%
	機械製造	13.2%	124.9%	16.4%	-13.5%	13.8%	11.9%	17.2%	9.2%	-11.8%
	電気機械	24.9%	88.9%	22.0%	4.7%	6.8%	21.9%	12.1%	-1.6%	-6.9%
	輸送用設備	93.9%	109.2%	1.2%	33.2%	5.2%	15.7%	5.2%	0.2%	-13.4%
	精密機械器具	26.1%	51.7%	15.9%	12.0%	13.4%	17.9%	21.2%	2.9%	0.7%

売上高		1950	1951		1952		1953		1954	
業種	決算期	下	上	下	上	下	上	下	上	下
産業一般		64.9%	79.7%	1.8%	15.6%	2.9%	9.2%	5.2%	2.2%	3.6%
製造業		51.0%	80.3%	-5.0%	17.1%	2.7%	8.1%	10.4%	-0.6%	-2.4%
鉱業		231.5%	62.2%	17.9%	2.1%	-4.1%	10.3%	4.6%	-5.3%	8.5%
建設業		4.2%	83.0%	23.6%	8.6%	8.8%	9.2%	24.6%	6.0%	4.1%
卸売・小売業		82.5%	101.8%	-1.0%	21.6%	3.4%	12.4%	-6.1%	11.3%	10.2%
不動産		10.9%	66.9%	52.0%	-2.2%	27.9%	19.3%	-27.5%	40.6%	-0.9%
運輸通信及びその他の 公益事業		41.0%	47.2%	36.9%	8.8%	7.1%	4.1%	8.9%	-2.1%	11.2%
	鉄道・軌道	3.4%	33.6%	19.6%	16.1%	-4.3%	14.6%	-10.9%	21.9%	0.0%
	海運	50.8%	328.1%	35.2%	5.8%	-9.4%	8.7%	3.4%	7.0%	15.9%
	倉庫及び保管	-4.0%	67.6%	2.2%	4.5%	-2.1%	8.9%	2.9%	-3.3%	-8.4%
	電気	10.5%	16.9%	69.7%	8.8%	22.0%	-5.3%	18.8%	-11.5%	21.2%
	ガス	23.0%	64.4%	18.0%	30.0%	-5.9%	27.0%	-5.0%	16.5%	-11.9%

自己資本収益率(税引き前)

現代日本経済史2004

	1951上	下	52上	下	53上	下	54上	下
全産業	31.6	23.7	18.0	14.6	16.0	16.2	11.4	8.8
製造業	54.7	38.2	26.2	22.5	23.4	23.9	16.1	11.9
食料品製造業	28.1	29.6	37.7	39.3	35.3	36.6	36.8	30.6
紡織業	72.7	42.9	21.8	16.0	18.2	24.2	15.8	8.3
紙および類似品製造業	101.9	64.0	29.9	25.6	31.3	26.4	14.9	13.4
印刷出版および類似業	19.3	22.4	24.0	24.9	24.5	23.9	19.6	16.8
化学工業	32.2	27.3	19.9	20.0	22.0	23.1	18.5	14.5
ゴム製品製造業	43.4	-4.6	9.9	12.2	32.4	22.9	21.9	8.1
セメント製造業	39.0	49.0	41.0	39.0	42.2	41.4	35.8	32.6
第一次金属製造業	42.2	26.7	17.0	10.0	9.4	9.5	2.8	3.1
金属製品製造業	52.1	41.2	37.1	35.5	35.3	20.2	17.8	13.6
機械製造業	44.1	40.2	29.2	23.2	21.4	17.1	10.9	3.7
電気機械器具製造業	46.0	50.6	47.5	41.3	38.2	33.0	18.7	11.0
輸送用設備製造業	26.3	33.7	44.2	44.2	37.9	28.3	15.2	9.0
精密機械製造業	45.9	36.1	38.2	36.2	35.8	34.5	24.2	20.6
鉱業	52.8	48.2	33.6	13.7	11.0	2.2	6.1	2.5
建設業	27.4	39.9	43.8	48.5	58.9	47.4	34.6	27.9
卸売及び小売業	36.0	-10.0	4.0	24.9	28.7	27.5	14.0	17.4

③労働生産性 従業員一人当たり売上高

	51年上期	55年上期	増加率
● 食品	1986千円	4238	2.13倍
● 紡織	732	769	1.05
● 紙パルプ	1321	1480	1.12
● 化学	599	1045	1.74
● 石油精製	2615	5322	2.04
● 鉄鋼	1017	1180	1.16
● 機械	463	593	1.28
● 電気機械	526	791	1.50
● 輸送機械	451	692	1.53
● 電力	360	854	2.37

● 意外に低い生産性上昇

→急激な労働力吸収による生産拡大

● とくに機械金属部門、紡織ほどではないにしても低い

- ④資本装備率 従業員一人当たり有形固定資産
- 機械部門の低い資本装備率
 - 機械526千円、電気機械511、輸送用機械438
 - 鉄鋼 1148千円、食品1148、紡織645、
 - 化学827、電力5928千円
- 電力とは比較すべくもないが、鉄鋼の半分、紡織よりも低い。
- 機械工業の労働集約的な性格を反映。③の事実とも整合的

競争構造の変動

- 上位企業への生産集中度の推移
 - 1955年までに、集配法等による企業分割、独占禁止政策の展開によって「より競争的な」企業間競争構造に転換したのか。
 - 戦前期の上位集中度と比べても競争的とすることについては、懐疑的。
- 分割による変化が生じた業種
 - 鉄鋼 分割二社のシェアの拡大により高い集中を維持
 - 造船 二位以下の順位の激しい変動
 - 石炭及び銅
 - 金属・石炭の分割であったことから、
マーケットシェアに対する影響は小さい

普通鋼圧延鋼材

	1934	1938	1943	1948	1951	1955
八幡製鉄	47.5%	42.0%	56.7%	29.4%	23.8%	23.0%
富士製鉄					14.8%	16.6%
日本鋼管	13.6%	13.9%	15.4%	15.3%	12.9%	11.5%
川崎製鉄	7.7%	5.5%	4.4%	8.7%	7.6%	8.6%
住友金属工業	1.7%	1.6%	1.6%	5.4%	3.6%	5.0%
神戸製鋼所	6.4%	4.8%	3.8%	8.0%	4.7%	3.8%

造船

	1937	1944	1951	1952	1953	1954	1955
三菱造船	35.4%	27.0%	17.4%	15.0%	17.7%	24.5%	19.0%
新三菱重工業			9.0%	12.1%	7.1%	7.0%	8.2%
三菱日本重工業			7.0%	11.8%	4.8%	6.4%	2.7%
日立造船	12.0%	6.9%	12.9%	11.9%	11.5%	11.7%	14.6%
日本鋼管	1.4%	1.7%	5.3%	4.1%	10.7%	7.4%	14.0%
川崎重工業	16.9%	4.6%	11.9%	6.6%	13.4%	7.8%	11.6%
三井造船	15.3%	11.6%	7.3%	11.1%	8.5%	5.3%	10.4%
播磨造船所	7.2%	13.4%	7.4%	14.2%	8.2%	8.9%	8.9%
浦賀船渠	4.9%	3.2%	5.9%	3.0%	7.4%	2.5%	3.6%
石川島重工業	1.4%	1.2%	4.0%	3.0%	2.4%	5.0%	1.5%
名古屋造船			2.2%	2.9%	1.5%	2.7%	1.4%
藤永田造船所	0.1%	0.1%	1.5%	1.9%	1.3%	2.3%	0.2%
函館船渠	1.2%	1.1%	1.5%	1.5%	1.2%	2.6%	0.0%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

石炭

	1935	1944	1948	1953	1954	1955
三井鉱山	14.6%	26.5%	15.7%	12.2%	14.3%	13.5%
三菱鉱業	10.3%	20.8%	11.6%	10.8%	10.5%	10.2%
北海道炭坑汽船	8.1%	8.9%	7.6%	7.6%	7.9%	7.3%
住友石炭鉱業	3.8%		4.2%	4.2%	4.3%	4.1%
宇部興産			3.3%	3.5%	3.9%	3.8%
明治鉱業			3.4%	3.8%	3.7%	3.6%
常磐炭礦			3.3%	3.7%	3.5%	3.6%
日鉄鉱業		5.5%		2.3%	3.3%	3.2%
古河鉱業	2.4%		3.1%	2.8%	3.1%	3.0%

電気銅

	1942	1951	1952	1953	1954	1955
日本鋳業	16.6%	29.4%	30.0%	31.1%	31.0%	30.2%
三菱金属鋳業	18.8%	21.9%	21.0%	20.5%	20.2%	22.3%
住友金属鋳山	7.2%	19.5%	17.5%	17.5%	17.4%	17.8%
三井金属鋳業	0.1%	5.2%	6.6%	7.8%	8.7%	9.3%
同和鋳業	5.7%	8.2%	8.9%	8.2%	7.3%	7.9%
古河鋳業	9.3%	8.8%	10.0%	9.3%	8.5%	7.7%
古河電工		3.2%	3.5%	4.0%	5.1%	3.6%
大日本鋳業	1.6%	1.8%	1.5%	1.6%	1.9%	1.2%
東邦亜鉛		1.9%	0.9%			
以上合計	59.3%	100.0%	100.0%	99.9%	100.0%	99.9%
全国合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

金融機関の貸し出しとその源泉

- ①高い自己資本利益率の背景としての、借入金依存＝「間接金融」
- ②預金源泉は、戦前と対比した「個人」預金比率の大幅な低下
 - ←1946-50年に「法人」「個人」の預金の構成比は逆転
 - 1942年預金者別比率 個人61.5%
 - 1946年 63.7%
 - 1950年 44.1%
 - 1955年 37.4%
 - 1960年 40.5%

- ・1960-65年に増加分の7割が「法人」となる時期ほどではないにしても、家計部門からの個人預金が資金源泉としての意味を持ったのはせいぜい4割程度。
- 法人の「余裕資金」が、つまり企業部門から企業部門への資金の仲介が「間接金融」のこの時期の実態。
- その背景として、高い自己資本比率に基づく内部留保資金
- 加えて、「歩積み両建て」による拘束預金→金利規制下の実質金利の差別化という銀行行動
- 架空の預金と貸出の両建てによって、「間接金融」規模を過大に見せかけている可能性がある。

産業資金供給

年中	合計 (A+B+C)	株式 (A)	事業 債 (B)	貸出(c)				自己資 金
				合計	民間金 融機関	政府金 融機関	融資特 別会計	
1931-35	100.0%	119.0%	3.1%	-22.1%	-25.8%	0.0%	3.8%	198.5%
1936-40	100.0%	43.1%	6.7%	50.2%	49.7%	0.0%	0.5%	45.8%
1941-45	100.0%	16.7%	6.4%	76.9%	74.9%	0.0%	2.0%	20.2%
1946-50	100.0%	13.0%	3.5%	83.4%	72.4%	5.7%	2.2%	40.0%
1951-55	100.0%	14.1%	3.8%	82.2%	71.9%	7.0%	4.1%	65.8%
1956-60	100.0%	14.2%	4.7%	81.1%	73.0%	6.0%	2.2%	69.8%
設備資金								
1952-55	100.0%	27.5%	8.9%	63.6%	33.5%	19.1%	9.7%	
1956-60	100.0%	25.3%	10.6%	64.1%	48.6%	10.6%	5.2%	